

## 札幌大学の思い出 (菱沼先生)

## 四期卒 小林 領子

五〇代ぐらいまで、学生時代の友人と交流する同窓会など、過去を振り返ることにあまり興味がなかった。昔のいろいろな失敗や後悔を思い出したくなかったのかもしれないが、最近は先も限られている人生を思うと、妙に若いころのことが頭をよぎり、なつかしく、ノスタルジーにひたることがある。「水源地」第二号に何か書こうと思ったが、学生時代の記憶はすでに曖昧となってしまつて、あやふやな事ばかりである。それでも頑張つて思い起こすところとちよつと異色で印象深い先生がいたことを思い出した。長身でいつも飄々としていてソフトを深々とかぶり、チャコールグレーのコートをダンデーに着こなし、授業ではつるつる頭を掻きながら、言葉の端に「〜でございまするが……」を連発してソビエト社会事情(?)の講義を行つてくれた菱沼圭介先生である。

先生の研究室にお伺いすると、必ず講義を終えたワレンチーナ松坂先生がいて、和やかな顔で紅茶を飲んでいた。「一緒にどうぞ」と誘われたが、私は授業中私語が多く、ワレンチーナ先生にいつも早口のロシア語でガミガミ怒られていたので彼女を見かけるとちよつと苦手で早々に引き上げた。

ある時、先生の部屋にロシア語学科三羽ガラスと称されていた同期の佐々木美知子さんと富樫和枝さんと三人で訪問したことがあった。話が弾んだころ先生から「暑いのでビールでも」と誘われた。これは「ラッキュー」ともちろん断る手はない、先生の行きつけの三六号線沿にある月寒中央の第一ショッピングセンター二階レストラン(食堂)へ直行し「とりあえず、ビール」とのどを潤した。その後、注文は、三本、五本と進

み二〇本ほど飲んだような気がする。先生がおつまみは必要だろうとコーンのバター炒めを注文してくれたが、先生は一切手をつけず、「ビールが食事替わり」と豪語していた。先生はよく利用していたようで、店では上得意様の対応、コーンのバター炒めは店主が「サービスです」と譲らないほどだった。ほろ酔いになったころ、先生から「ビールが家にあるので自宅に行こう」と誘われ、「それじゃー」とタクシーで公宅へ直行した。すでにさんざん飲んでいるがせっかくの先生のお誘いなので、かゝるく息を整える程度の気持ちで向かった。

公宅の部屋はシンブルで先生の性格を表すように整理整頓されていた。ビールの保管場所は冷蔵庫と思いきやタイルバリの浴槽に横倒しで冷たい水のなかにビッチ満たされていて、一瞬「すごい量!」と驚いた。「すきなだけ飲んでいいよ」とのこと。気が付けば、先ほどあんなに飲んだのに、まだいくらでも入っていく。気が付くと、ビール瓶がテーブルの上、床に林立、浴槽中のビールをほとんど飲み上げてしまった。後にも先にもあれほどビールを飲んだ経験はない。今考えると、一生飲むビール量のあらかたを飲んだのかもしれない。先生もロシア語学科の女蟒蛇(うわばみ)三人には、さぞかしあきれたことだろう。

先生とビールを飲みながら、先生の「歴史」について少しお聞きした。戦中先生は中国東北地方にいて、日本が敗戦の報を事前に察知し、家族で急遽、日本へ帰国されたとのこと。子供が小さかったので道すがら朝夕の寒さで体調を壊さないようにと体温で温めながら脱出したという大変な旅だったそうだが、先生が現地でのどんな仕事をしてきたかは聞か

かった。しかし、ロシアに関する仕事をされていたことには間違いがなさそうだった。

以後、先生とは個人的には飲みに行くことはなかったが、先生という垣根を超えた親しい関係が築かれた。翌年の夏休みに富樫氏と東北に旅行に行った際、厚かましくも先生の福島県二本松市のご自宅に二日間も逗留させてもらった。ご自宅は郊外で周囲には桃農家があり、朝に奥さんが完熟した桃をどんぶりに一杯出してくれた。その時、桃がこんなに美味しいものかと大感動した。家には先生とそっくりの顔立ちで長身の岩手大学四年生の娘さんが帰省していた。

先生が札幌大学を定年されて、数年後にご病気で亡くなったと人づてに聞き、遠隔地よりご冥福を祈ったが、もし機会があれば墓前に好物のビールをお供えしお参りしたいと願っている。

九年前に起きた東日本大震災では、東京電力福島原発事故の影響で全県の放射線量が高くなり、名産の福島産桃も出荷停止と聞き胸が締め付けられ、とても悲しい思いにかられた。菱沼家訪問以来、桃は福島産しか買わないようにしていたが、事故以来数年間、市場から福島産の桃は消えていた。未曾有の大地震による津波が原発事故の発端とはいえ、二本松市は、美しく優しい稜線をもつ安達太良山にいだかれた歴史のある町である。そこで平穩に暮らしていた多くの人々の生活基盤を一瞬に根底から破壊したことを考えると今でも辛い思いにかられる。

青春時代を華やかに彩ってくれた菱沼圭介先生をはじめロシア語学科の諸先生の心ある暖かいご意志にはいまだ応えられないが、今でも諸先生のご厚情にはただただ感謝である。

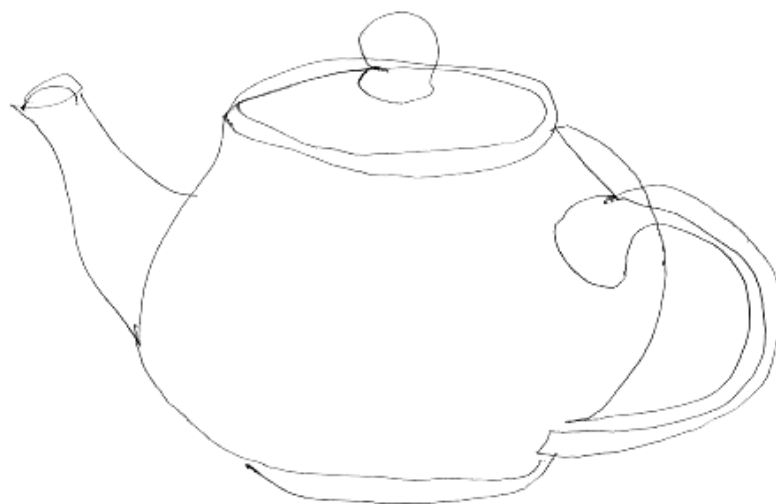


イラスト (C) 草野 義彦